

小・中学校国語科書写における実践的研究

——文化継承の書写教育と文字環境の変化との関連——

林 田 恵 実

一、はじめに

小学校国語科書写における指導は、小学校学習指導要領

第2章 第1節 国語、第3 指導計画の作成と内容の取扱いに位置付けられ「硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うこと。また、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、各学年年間30単位時間程度を配当すること。」と明記されている。更に、各学年ごと

「(2) 書写に関する次の事項について指導する。」とある。

〔第1学年及び第2学年〕

ア 姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意し

ながら、丁寧を書くこと。

イ 点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。

〔第3学年及び第4学年〕

ア 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。

イ 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。

ウ 点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。

〔第5学年及び第6学年〕

ア 用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。

イ 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

ウ 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識

して書くこと。

また、中学校国語科書写における指導は、中学校学習指導要領第2章第1節国語、第2 各学年の目標及び内容の各学年ごとに、2内容として明記されている。各学年の事項は、次のとおりである。

第1学年

(2) 書写に関する次の事項について指導する。

ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解し、
楷書^{かいしよ}で書くこと。

イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。

第2学年

(2) 書写に関する次の事項について指導する。

ア 漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、
読みやすく速く書くこと。

イ 目的や必要に応じて、楷書^{かいしよ}又は行書を選んで書くこと。

第3学年

(2) 書写に関する次の事項について指導する。

ア 身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

(2) 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の
(2) に示す事項については、次のとおり取り扱うこと。

ア 文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。

イ 硬筆及び毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うようにすること。

ウ 書写の指導に相当する授業時数は、第1学年及び第2学年では年間20単位時間程度、第3学年では年間10単位時間程度とすること。

筆者は現在、高等学校の芸術科書道の非常勤講師、熊本大学文学部の非常勤講師「書道」、書塾教師などの立場にあり、以前の、小学校書写専科教諭、熊本大学教育学部非常勤講師「書写」としての経験を通し、書写・書道の指導に関して気づいたことが何点がある。

最近、特に感じることは、横書きをすることが多くなった現代で、縦書き文化の中で生まれ形成された、漢字やひらがなの字形や筆順が変化して使用されている実態がある、ということである。それは高校生、大学生に強く思われる。

筆記具の持ち方においても千差万別である。高校生の定期考査の試験監督の度に、シャープペンシルの持ち方や姿勢を、チェックしてみるが、「正しい持ち方」と思えるのは四十名中、

三名程である。シャープペンシルは、握り込んで親指が出ていたり、親指が曲がつてつけ根でペンを支えていたり、ペンの角度は、立っている生徒が多い。そのために、指の動く範囲が狭く、文字は略小さい。しかし丁寧に整えて書いており読みやすい。またハネのない文字も多く見られる。

日常目にする文字も看板やCMなどのレタリング、筆文字も商業的に目立つもの、商店のPOP、パソコンのフォントも沢山あり、多様化した字形は、生活に溢れ、潜在的に取り込まれ、格調高い文字の姿に触れる機会は、なかなか得られないのが現状である。

本稿は、そのように変化する環境の現代での書写教育、また、過去から変わらず、継承させていきたい文化や技術を体得し、豊かな人生につながる書写教育について、これまでのさまざまな教育実践をふり返り、書写書道教育に関して生涯学習の視点に立った在り方を、実態把握を通して考察するものである。

二、小学校書写専科教諭時の指導

筆者は、すでに二七年も前のことになるが、書写専科教諭として、小学校に勤務した。三〇学級以上で、専科を三名配置できるので、学校側は音楽、図工、理科を希望したが、理

科が見つからず、急遽、書写の募集があり声を掛けていた。一年間という短い期間ではあったが、それまで、高校書道、書塾での指導の経験しかない私にとって、学校現場での書写教育は貴重な体験となり、その後の活動のベースになったと思う。

その折の授業をここに取り上げてみたい。

小学校第三学年から第六学年まで、各五クラスあり、週に一時間で、二〇クラスを担当した。内容は、教科書に沿って指導したが、字形を整える為には、毛筆での正しい筆使いをきちんと伝えたい、と考えていたので、大きく範書し、筆の状態を細かく説明し、筆の扱いのおもしろさを体感できるように、声かけ、目配り、を心掛けた。机間支援をしながら「姿勢がいいね」「筆の持ち方がいいね」「今、うまくいったね!」と、なるべく褒めるように心がけた。自信なさそうに書いている児童には、手を添えて「筆の弾力、わかる?」「押さえすぎないようにね」など、声掛けを行った。それらは、現在振り返っての事で、実際は、もっと熱血指導だったかもしれない。筆使いは、一朝一夕に身につくことではないが、理想の形を提示することが大事で、それを、面白いと思って練習し、技能を獲得すれば、上達につながり、そのスキルは、他のことにも通じ、まさに「生きる力」を育んでいるといえる。手を添えた時など「何か違つてうまく書けた」という感

覚を伝え、刺激になればよいと考えていた。

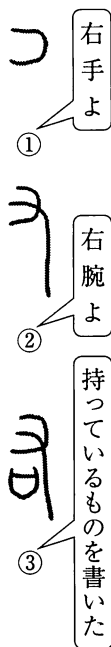
一年間ではあったが、印象に残っていることは多い。その中から、以下に四つの実践として纏めてみたい。

1、左右（第四学年・毛筆）

左右

めあて…筆順に気をつけて、字形を整えて書こう。

これは、漢字の成り立ちから説明した。黒板に①②を言いながら書き、右手を黒板の文字に合わせて置き③を言いながら書いた。



「ハ」はサイといってふたのある器で神様の祝詞を入れる箱、左手も同様に、

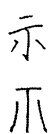
持っているのは「工」。神に仕える人が祈りごとをする時に持つまじないの道具。

両手を黒板に置き「左右は、左手と右手が元になり、持っている物を書いて、この漢字が出来たんだね…右手で「工」を持って、神様どちらにいらっしやいますか？」と尋ねてのよ。」と話すと、児童は、一斉に注目して、瞳を輝かせた。

「だから、筆順は、手、腕、持っているもので、腕が長い」と話し「活字では、左右の横画の長さは同じだけれど、手書きではこの筆順で、腕の部分を長く書こうね。」というと、児童は、気をつけて、練習に励んでいた。



「左右」の授業で、手応えを感じたので、折りにふれ、漢字の成り立ちを話した。



「神を祭る時の祭壇の形だから、もともと神の意味」「だから神社、とかについている」としめすへんに繋げることできる。

集 集 集

中国では、三つ書いたら沢山の意味で「水に、沢山の魚が集まる」と言え、「集まる」と児童が答えてくれた。

飛 飛 飛

「鳥が、羽を広げて飛んでいる形からできたんだって！」など、である。知らなかったことを、楽しく知るのには、単純におもしろく、知的好奇心を刺激する。

このような、漢字の成り立ちの話は、子どもから大人まで感心して聞いており、私達が、普段何気なく使っている文字に歴史を感じ、文字そのものの貴重さに気づくからだと思う。三千年以上も前に中国で生まれ、千七百年程前に、日本に伝わり、今も同じような意味で使っている漢字である。

その成り立ちを研究して謎を解こうとした学者に、日本では、藤堂明保氏⁽¹⁾、白川静氏⁽²⁾がおり、二人の解釈は異なるが、私は、白川静氏の説に拠った。

白川氏の出身である福井県では、県教育委員会編・発行による『漢字の世界へ』という著作があり、福井県の小学生は、学校の授業で使用している。二〇一一年の発行で、児童の漢字学習の世界を広めてくれるすばらしい取組みだと思う。

2、道（第五学年・毛筆）

道

めあて：「によう」の組み立て方と筆使いに気をつけよう。

「によう」と中の部分の組み立ては、中心がとりにくい、という難しさもあるが「しんによう」の形、筆使いが難しい。線の方向、筆の動き、筆圧の変化を短い時間に判断して書くので、思いがけず太くなったり、長くなったりで「えっ！上手く書けない、難しい！」という声上がる。

道

このようになりがちである。一気に書くのは難しいが、動きを分断して、その時の筆の状態や筆圧、方向を認識すること、落ちていて丁寧に取り組むことが出来、結果、うまく書けるのではないかと考え、次のように指導した。

黒板に大きく三本の縦線を書き、児童にも同じように半紙を横にして三本の縦線を書くよう指示した。



①三本のまん中に、一画めの点を書いて、



③左に行かず、下に下りて筆を引き上げる(筆は立つ)。



⑤改めて左端から起筆し、今来たとこをまん中に戻る。



②うんと空けて左端の線からまん中まで、右上に書く。



④右端まで、筆圧を加えて、その弾力で、左端まではらう。



⑥右斜め下に下るときは徐々に筆圧を加え、一番太い所で止まって右方向へはらう。

この要領で範書し、児童にも三本線入りのプリント、籠字プリントを使用して練習させたところ、大変バランスの良い形になり、はじめて書いた「道」より「上手になった!」と喜んでいた。筆圧やはらいは難しいが、線の方角を明確に意識することで、イメージが出来たのだと思う。完成された形を具体的にイメージすることで、表現が楽になり、余裕も生まれ、丁寧に書けたのだと思われる。

手本と比べると、厳密には三本線の通りではない。しかし三本線を意識することで二画めが左に行き過ぎるのを防ぐ効

果がある。上達したい人は「もっとよく観察して、工夫をすると『しんにょう』の達人になれるね!」「『辺、近、送、遊』なども上手になるね!」と、共に工夫し結果を喜んだ。このように細かく観察し、丁寧に書くことの体験は、他の内容の事柄の上達にも生かせると思う。

3、筆順(硬筆)

「毛筆を使用する書写の指導は、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにする」ということが、『小学校学習指導要領・国語(書写)』に記載されており、硬筆の上達こそが、重要な目標になっている。硬筆が、日常的だからである。その硬筆も、整えて書くには、字形に対する意識化を深めることが必要である。意識化する時、筆順は大きな要素となる。筆順に従って書くことで書きやすく、整えやすく、かつ、読み誤りにくくなるからだ。現場でも教える際、必ず、筆順は指導されているが、児童は、忘れたり、間違えて覚えている文字がある。九、方、皮、服、佳(ふるとり)、劇、などは間違いやすく、特に服、劇は、取り上げて説明した。一例を示す。

服 ㇿ
ㇿ

ㇿ が正解だが、ㇿ の間違いが多かった

他校の研究授業を見学に行き、意見交換会にも参加し、大変感激した記憶もある。さらに、書き方大会もあり、教師も児童も、書写の重要性を感じ、保護者も含めて、熱心に取り組んでいた。現在、文字環境は、大きく変化したが、文字はこれからも書き続けられていくだろうし、文化の継承は、必要なことである。私自身「草の根運動」のように、書写、書道の魅力を伝えていきたいと願っている。

三、熊本大学教育学部における指導について

熊本大教育学部の書写の講義は、受講生は一度に百二十名程、前・後期各々七・五時間で硬筆が三時間、毛筆が四時間、まとめとレポートが〇・五時間という設定である。テキストは『明解書写教育』（全国大学書写書道教育学会編、萱原書房）を使用した。

受講生が多いが、実技を伴う内容であるため、T/Tの形態により、神野雄二先生とともに取り組んだ。細目に、机間支援を行い、個別に質問を受けたり、ポイント説明、手を添えたり、書いてみせたりして、学生に、解り易くを心掛けた。姿勢・執筆法にも目配りした。

神野先生は、学生が教師となって書写を授業する際に、必要な知識や教養を興味を引くように、時にユーモアも交じえ、

丁寧に講義されていた。

一時間目、神野先生から「硬筆では、木製の鉛筆が、筆圧の変化や、止め、はね、払いなどが書きやすいし、児童にも鉛筆で指導するようになっていくから鉛筆を準備するように。」との説明もあったので、その必要性を理解した学生は、鉛筆で取り組んだが、三時間ともシャープペンシルで書いている学生もいた。

毛筆になると、書道道具が必要になり「大筆は根元まで動く状態の良い筆を。なければ新しいものを購入して下さい。」と話されたが、上部が固まっていたり、毛がバサバサだった、あまり機能しない筆を持参する学生もいた。

本来、用具・用材の準備は、徹底したいが、百二十名対象となると、その意識は、年度や、クラスで差が出た。

高校の書道の生徒は、芸術の音楽、美術、書道の中から書道を学びたいと選択し、書塾の子ども達も、本人や保護者の希望で習いに来ているため「関心がある」が、スタートラインである。しかし、教育学部の学生は、それぞれの専門があり、書写に関しては苦手意識を持っている学生もおり、百二十名の中に、かなりの温度差があったと思う。

毎回、百二十名の添削をすることで、驚いたり、納得したり、実態を把握できたことは、これからの教育に生かせると感じた。以下その教育実践の内容に関して述べる。

1、ひらがなの形の変化とともに、筆順の変化（硬筆）

二時間目の内容は、小一のひらがなの指導で、五〇音の手本を見て書く、であった。神野先生が、概形を意識させることや、むすびを丁寧に指導することをポイントとして説明された。学生の提出作品は、字形、筆圧、筆勢など、よく書けたものは一割程度だった。

では、どのような文字が多かったか、掲げてみたい。

ア、筆圧が一定で、筆勢がない。

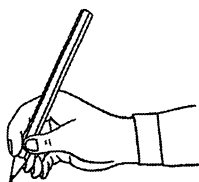
イ、横画が、やや右上り、ややそらせる、などの微妙な表

現が、ほぼ、水平に近い直線的な横画になる。

ウ、字形が、左部分が大きく、右部分は小さめになる。

多くはないが、文字をマスいっぱいに書いたり、小さすぎたり「も」「せ」の筆順を間違えていたり、同じ手本を見ているに関わらず理解度の差があった。

これらについては、普段の運筆が、そのようなだろうと思つた。鉛筆の持ち方は、自在な動きができるよう、三点で支え、



角度も六〇度程、が正しい持ち方である。姿を見ると「はじめに」で述べた、高校生と同様の握り込んで親指が出ている生徒が多かった。注意をすれば、正しく持つが、書き始める

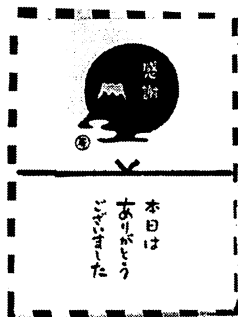
湯前豊店 おかげさまで

45周年を迎えました!!

残暑が残っていますが、秋らしく涼しい風が吹く十月になりました。早くですれし今年もあと三ヶ月。涼しくなると秋がやってくるのを待ちたいですね。今が一番暑い疲れが出る時期です。ご自愛ください。

おかげさまで湯前豊店は四十五歳になりました。これもみなにお客様の愛顧賜と感謝致しております。

きくちしんがきくちの音楽
11月11日は「きくちの音楽」の日
お祝いとして、全店でお祝いします。
期間：11月11日（土）13時～16時
会場：全店
お祝いとして、全店でお祝いします。



今月のコラム

こんにちは、トッドです! (ちりこ カハハル)
相変わらず熊本の夏は「酷」暑ですね。7月の30日は外に出る度、あつたなつたはす。巻で話題の扇風機内蔵ジャンパーを買おうかな。
さて、今月はネタ切れなので、近況報告させていただきます。
トッド: こんにちはトッドです。ナンシー: こんにちは、いします。
トッド: ナンシー、近況調子はどうですか?
ナンシー: 調子ですか? いいですよ。あ、先日、岐阜へひとり旅行して、三子さんの蔵書室、いや、主として、お話を聞ける、本に勉強になりました。
トッド: あー、そうだね。今月の新潟・緑川もそうだったけど、湯通りの現場、



(↑チラシ)

(↑店舗通信)

といつもの癖がでていた。

更に、普段から目にする文字が、方形でデザイン化された活字体が多く、ひらがなが生まれた古典をもとにした美しい姿を目にすることのない人は、活字体が基本になるのは無理もないことで、以下の文字を書くことになる。

新聞や広告で見る手書きの文字でさえも同様のスタイルをよく見る。つまり現在の流行なのである。

書塾に通う小学生が、小五まで書写的スタイルで書いていたのに「ダサイ」といつて今風のスタイルに憧れたりする。かわいいノート、カッコイイノートに似合う形、好きな芸能人の文字を真似る、カラフルペンで書いて映える形など。普段書く文字にレタリングの要素があるものが魅力的、なのだと思う。指導は「両方書けるのがいい」とアドバイスしている。本来、漢字やひらがなは縦書文化の中で形成されてきたため、縦回転の性質をもつ字形であるから、これを横書にする場合、それぞれの文字の中心を揃えたり、下のラインを揃えることで手書き文字が、美しく見えるように工夫してきたが、それは、本来のかなの姿を尊ぶ意識があつてこそその工夫である。しかし、横書きの形式が多くなることで、字形は変化する。横回転しやすい形に変化させて使用しているのである。

その横書きに速さを加えると、ますます字形は変化し、筆

順までも、書きやすいように変えるのである。

熊大生のひらがなの字形や筆順の間違いには、大変驚かされた。

高校生の例を、併せてみてみたい。高校生に手本なしで、いつも書いているように、といつて五〇音を書かせてみた。

ひらがなのひょう

あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	

あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	

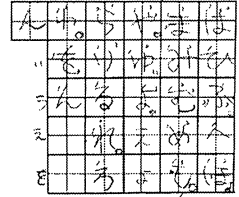
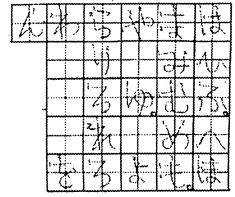
あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	

あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	

あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	

あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	

あ	か	さ	し	ち	は	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん
い	き	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
う	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	ず	づ	く	す	
え	け	せ	じ	ぢ	ひ	ふ	ぶ	み	め	も	や	ら	わ	ん	
お	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	ぞ	ぞ	こ	そ	



そして、筆順の確認をしたところ間違っていたものに、次のような結果が出た。

も 一ニモ(8名)
 やーや(3)
 せ一せ(2) し七せ(1) われれ(1) 水
 けしけ(1) わろわ(1) や
 (19名中)

どの文字も横への移動がしやすいように変えたのだと思った。

以前、漢字の筆順のことで、箭内道彦氏がTV番組の中で話で「結果、その形になって、その意味で伝われば、筆順なんて関係ないですよ」と発言され、私はTVの箭内さんに向かって「筆順が違えば、形も変わって読み誤まれることもあるんだよっ！文化、大事にして！」と言いつ返ししたこともあるが、このひらがなを見ても筆順が変われば形も変わることは、一目瞭然だろう。

かなは、中国から漢字が伝わったことから音だけを借りて

表記し、万葉仮名が作られ、やがて平安時代になって、草書をさらに簡略化してかなができた。日本人の美意識が、このかなの形を作り出したのだと思うと、多くの人に、その美しい形を知ってほしいと願う。

熊大生にも、かなが生まれた時の形を知り、書写でひらがなを教えるということは、文化も教えることと思って、本来のかなの姿を学んで、一点一画、一文字一文字を大切に、指導してほしい、と話した。

2、接筆部分のとまどい(毛筆)



これは、毛筆で「水」を書いた時、一画めの縦画と二画めが、つかないように空ける、というの、よく注意するのだが、熊大生の提出作品はaのように四画めが、一画めの横から始まっている作品が多かった。中心から始まるのが、当たり前だと思っていたので驚いた。手本は、中心から始まっているので、手本をよく見ていないのかとも思ったが、多くの学生が、aのように書いていたので、神野先生に話したところ「厚みの意識がないからかな」とおっしゃった。毛筆で書

くことに慣れていない学生は、硬筆で書くのと同じように、一画めの厚さ（太さ）を意識しないで、その脇から書き始めたのだ、と合点がいった。



「光」はbのように、三画めの方向が、四画めの起筆に向かわず、一、四画の交差部分に向いているのが多かったが、元の起筆が、横画の中から始まっているのも目立った。五画めの左はらい、六画めの曲がり、はねは、用筆の問題で、五、六画めの起筆が見えないことは、毛筆に慣れていないため、硬筆の要領で、接筆がわからないのだと思った。他にも、硬筆がベースになっているから接筆部分が、きちんと表現されていないと思われるところがあつた。（進（佳）展（英））

毛筆は、起筆、送筆、収筆は、筆順を重ねての筆脈があつて字形を成しているが、接筆部分は、古典に拠つたものを手本とし、それぞれの画の始まりの位置、筆圧、方向を丁寧に見て、そのリズムで何度も書いてみなければ、慣れないし、硬筆の字形しかイメージできなければ、接筆の表現は難しいことが分かつた。

3、正しい筆使い

これが、大変難しく、一朝一夕に習得できるものではない。文字の「止め、はね、払い」が毛筆の特性によつて形成されてきたという歴史的背景があるので、毛筆を使用して練習することで、正しく整つた硬筆文字を書くのに効果的、ということだが「止め、はね、払い」の前に、まず、懸腕直筆、さらに「起筆、送筆、収筆」がうまく出来ない、横画・縦画・折れ・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり・複合画につなげることも難しい。書き始めにベタツと筆を置き、そのまま書けば、筆は機能しない。要領をつかむには、かなりの時間を要す。

熊本大教育学部の学生も、七・五時間の間に、講義もよく聞き、練習し、上達は見られるが、正しい筆使いを小中学生に教えられるようになるには、まだ数倍の時間が必要だろう。

熊本大教育学部の指導で、自分が気づかされたことを、三点に亘り述べたが、熊本大生に限らず、現代の書写教育の問題点でもあると思う。硬筆の持ち方、横書きと字形、筆順のこと、毛筆に不慣れなことなどである。社会全体の時代の変化が、このような問題に繋がっているという現状を把握して対策を立てていかねばならないだろう。出来る限り実技の時間を多く確保し、少人数で丁寧に指導できるのが一番望ましいといえよう。

四、熊本大文学部における指導について

今年が、はじめてだったが、前期で一五時間、二、三年生の教職志望の必須科目で「書道」がある。一時間めのアンケートで、高校の芸術選択の教科と、この講義に、期待すること、を尋ねたところ、芸術の書道選択者は二名で、六名は音楽、美術なので、筆を持つのは中学以来という。期待することは「まず、自分が上手になりたい」が多かった。

書道選択者が少ないので、書道史に沿って、篆・隸・草・行・楷・漢字かな交りの実技中心に、書く時間を確保し、教科書の書写授業の理論と実際は、各自、自宅で読んでもらい、質問形式で、要点や考えを話してもらうようにした。

篆書の際は「漢字の成り立ちエピソード」は、「皆興味をもってくれるから」といいつつ、クイズ形式で、黒板の篆書を分かるものから読んでもらい、説明した。実技は、泰山刻石（秦）の臨書で、逆筆は慣れるのに時間がかかったが要領をつかむと、筆使いは単純なので、皆上手く書けた、懸腕、直筆も目が届き、よく出来ていた。

隸書も横画の水平が、右に上がりそうになりながらも気を付け、波磔も頑張って形良く払おうとしていた。

他の書体も、範書をよく見てよく書き、手本を観察しうまく出来ないところは、アドバイスを求め、一人、百枚以上は書いており書いた分だけ、それぞれが上達を感じていた。

一五時間めには「うちわ」に好きな言葉を書きな書体で、創作した。書を学ぶことで、実用としては、正しく、整った文字を書く良さがあり、楽しみとしては、自分が良いと思う形で自分らしい書を作っていく良さがある。創作は楽しく、うまくいかなければ、もっと学びたくなる、生涯の楽しみになり得る、と話した。

丁度、尚絅大学教授林田俊一郎先生の個展⁽³⁾が開催されており、見学、鑑賞し、感想を提出してもらった。興味ある内容を含んでいるので、ここに抽出する。

a、なかなか自らは行こうと思わない書の展覧会に、はじめて行つてその場の空気を感じ、作品を味わう時間は充実していた。

b、表現することを考えたり、書かれた言葉の意味を更に詳しく知ろうと辞書を引くことで、素晴らしい言葉との出会いもあった。

c、気持ちを書いた作品でプレゼントできるのは素敵。

d、淡い墨の作品をはじめて見た。作品のイメージで墨の色も作れることを知った。

e、書は古いものだと思っていたし、字を見ておもしろいか、と決めつけていたが、実際に見ると、いろんな可能性のある芸術だと思った。

f、自由な表現が効果的に書かれていることが芸術の書道だ

と思った。作者の特別な感情が存分に表現されたものだと思うった。

八名という人数が最適、と思えるほど、落ち着いた環境でじっくり取り組み、上達が見られた。急ぎ足で、次から次へとエッセンス的な古典をほんの少し臨書しただけなので、時間があれば、世界が広がるし、奥も深いので機会があれば、また練習してほしい、と結んだ。

まとめとして(1)書写教育の必要性、(2)書写を指導するに当たって大切にしたいこと、を尋ね、考えを述べてもらった。それぞれの考えを纏めて、ここに紹介する。

(1) 書写教育の必要性

a、「書写は、単に文字を書く、ということではなく、手本を見る観察力と、見たものを正確に筆の先に伝える集中力が求められる。その力は、本人が一番自覚でき、他の教科では得がたい達成感につながり、書写を通して、集中力と客観的に見る力が身につき、人間的な深みが増す。」

b、「自分の気持ちを伝えようとする時、手書きの文字は、その人を表す。自分の文字を読む人に対して適切な表現が出来るようになる為には書写教育が必要。また書の歴史を学ぶことで文字に対する興味も深まる。」

c、「書く楽しさと伝統文化の継承…情報を伝えるものは文字だった。その書の歴史は継承され、守られていくべきだ。」

d、「文字を丁寧書くということを学ぶことで、じっくり鑑賞する、バランスを知る、という意味でも必要。上手い字を目指すのではなく、その文字を読む人に誠意が伝わる字を書くことに重点を置く必要がある。」

e、「文字は、自分のためだけでなく、誰れかに読んでもらう場面が多々ある。その時に、読みやすく丁寧な文字を書く必要性、また、手書きに込められた気持ちを大事にする意味も必要。」

f、「手書きの文字は、書き手の自己表現で、感情を相手に伝える力を持っている。文字の成り立ちを学び、自己表現の喜びにつながる書写教育は必要。より早く、より多くの情報を、となれば、情報機器も必要。」

(2) 書写指導で大切にしたいこと

a、「自分自身は、あまり達成できなかったが、筆の弾力と筆脈…毛筆の楽しさ、奥深さをその二つに感じたから今まで何気なく見ていたが、この二つを知ること、筆を運ぶコツが実感でき、文字の止め、はねが、意味のあることと理解できたから。」

b、「生徒の個性を生かしつつ気持ちの込めった字が書ける

今後の書写教育の希望が思えた。

五、おわりに

書写書道教育の研究は、今後実践研究の成果と蓄積が課題であろう。教材の研究を進め、それを書写書道教育に有効に活かすための教材開発を行うことが大切である。

これまでの狭い指導に囚われることなく、現状の改善を期して、魅力に富んだ教育を創出する必要があるだろう。そして生涯にわたって文字文化を重視し、さらには文字文化を創造していくことが大切であろう。

毛筆による書写書道教育の学習実践は、我が国の伝統的で豊かな言語文化を認識し、また文字文化を尊重し、親しんでいく態度を育成することが重要である。今、毛筆書写書道教育の一層の充実が求められており、特に次世代を担う青少年の育成に力を尽くすべきだろう。

筆者自身、書道塾を含め、書写、書道教育に携わって、五年になるが、その根底には「自分が、興味、関心をもって学び、誰かに伝えることで、喜んでもらえ、その楽しみを共有できる」という単純な喜びがある。

時代の流れとともに、様々な事柄は大きく変化し、目にする文字のスタイルも多様化した。驚くことも多いが、そのよ

ように、書の正しいあり方を伝えたい。」

c、「丁寧に書くことは、どういうことかを正しく教えたい。それは、姿勢、執筆はもちろんのこと、一点一画気をつけるが、用紙とのバランスまでも配慮すること。」

d、「個性を気づかせ、伸ばすこと。今回、自分自身が、基本は大事だが、きれいではない自分の字も持ち味になることを学んだ。書写は、個性を展開させる授業にもなる。」

e、「美しい字より、丁寧な字の書き方を大事にしたい。子どもたちに基本的なことは伝えるが、各々が目標を立てて、意識的に取り組めるようにしたい。」

f、「自分が好きで、続けて来れて実感があるため、興味、関心をもってもらえるよう働きかけ、楽しさを共有したい。」

g、「大事にしたいことは三つ。一つは、基本的知識、技術をしっかり教える。二つめは子どもの個性を引き出し、自己表現の喜びを教え、書くことを好きになってほしい。三つめは、子どもにとって分かりやすく、力がついたことを実感できる指導を心掛けたい。」

一五時間の間に、書道の魅力を、書写教育への関心を、正しい筆使いを、表現の楽しさを、と盛り沢山な内容で行ったが、まとめの文章を読むと、私の多くの考えが伝わっており、

うな状況を把握した上で、共存できるような価値感も、持ち合わせたいと思う。

確かに現代的なものに魅力を感じる人もおり、伝統的なものに魅力を感じる人もいる。しかし、歴史あるものは確かなものとして存在する。常に「私ができることは何か」と考えることが重要であろう。私が大切に思うことを書写・書道教育を通して、今後も伝えていきたいと念願している。

本稿を執筆するにあたり、尚綱大学教授林田俊郎一郎先生、熊本大学教授神野雄二先生に種々ご助言を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。

【註】

1、藤堂明保（一九一五—一九八五）中国語学者・中国文学者。大正四年九月二〇日生まれ。一高教授をへて昭和三九年東大教授。四五年東大闘争で全共闘側を支持し、学生の処分に抗議して退職。のち早大客員教授、日中学院院長。昭和六〇年二月二六日死去。六九歳。三重県出身。東京帝大卒。著作に『漢字語源辞典』、編著に『学研漢和大字典』など。

2、白川静（一九一〇—二〇〇六）中国文学・中国古代学者。福井県生れ。一九四三年に三三歳で立命館大学法文学部漢文学科卒。一九五四年同大学文学部教授。一九七六年定年退職し、のち名誉教授。二〇〇五年立命館大学白川静記念東洋文字文化研

究所を設立、名誉研究所長。一六年文化勲章。平成一八年一〇月三〇日死去。九六歳。

3、林田俊一郎書展（アートスペース大宝堂、五月一七日—二日）

（主要参考文献）

・『明解書写教育』（全国大学書写書道教育学会編、萱原書房、二〇一七年）

・『白川静博士の漢字の世界へ』（福井県教育委員会編、平凡社、二〇一一年二月）

・加藤達成監修『書写・書道教育史資料』（全三巻）（東京法令出版株式会社、一九八四年）

・久米公著『書写書道教育要説』（萱原書房、一九八九年一月）

・『高等学校芸術科書道指導資料・鑑賞編』（文部省、一九八一年六月）

・文部科学省『高等学校学習指導要領解説』芸術編（教育出版、二〇〇九年一月）

・『書写書道教育研究』（創刊号／第三一号、全国大学書写書道教育学会、萱原書房、一九八七—二〇一七年三月）

（はやしだ・めぐみ 熊本大学文学部非常勤講師 前熊本大学教育学部非常勤講師）